
魔剣から始まる物語

むささび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔剣から始まる物語

【Nコード】

N9290Z

【作者名】

むささび

【あらすじ】

主人公は少し捻くれている考えをもつ中学生二年生。中学生にしては知識が豊富だが、やっぱりどこか捻くれています。時折人生を悟ったような風を見せる。そんな主人公、向井 むかい 夕 ゆう は、ある日を境に見たこともない世界へと飛ばされてしまう。そこで見つけた剣から、彼の物語がスタートする。

基本的にまったりと進む物語。一話ごとの文少量は少なめでさくさく読めていけるような小説にしていけたらと思います。

00? プロローグ(前書き)

彼の周りは木で満ちている。真っ暗で、月だけが彼に微笑みかけていた。彼は、そんな中で目を開ける。

00? プロローグ

さっきまで、燃え盛る家にいたと思ったんだけど、

ここは、どこだろう。

「……夜。だね」

周りは暗いな。

ここは、森？

変な鳥の鳴き声も聞こえる。「ほぐ、ほーぐ」「……」こんな鳴き声する鳥がいるかは怪しいけど。

空が、きれいだな……。

月がまん丸……やけに大きいし青白い。僕の知っている月とちよつと違う。

……そろそろ状況整理をしないと。

えつと、柳井さんの家が燃えた。燃えたね。それで、春が取り残されたって叫びながら隆介が家に飛び込んだって聞いた。僕も飛び込んだ。春がダンスに挟まって、それをどけようと隆介が頑張ってたから、手伝った。春を助けて、それから、家の外に出て。

……いや、出てないか。出ようとしたら家が崩れたから2人を突き飛ばして、僕が下敷きになったのかな？

……死後の世界かな、ここは。

「綺麗なところだから、天国？」

暗いけど、空気は澄んでるし、星は見えて綺麗だし、葉は青々と生い茂ってるし。

「……死んだ後が皆こうなら納得だけど、普通に傷口から血が出て痛いし、服は焼け焦げてて肌寒いし」

意味不明だよ。死んだら、そのときの姿のまま幽霊になるとか、そんな話もあるからまだこの姿に納得してもいい。服がボロボロで焦げて焼け落ちて、ちよつと生まれたときの姿に近いのにはまだ納得できる。ただ、寒くてだんだん体調が悪くなるのには納得いかない。

……まあ、このまままた死ぬのでも構わないけど。

いや嘘。せつかく変なところに着たんだから観光でもしないと損だ。

よっし、節々が痛いから、あそこに見える祠みたいところで休憩してから出かけますか。

あれ、あそこ……剣？ 見たいなのが刺さってるな。台座に刺さってるのかならかつこいいのに、無造作に壁に突き刺さってるって言うのもどうなの。

この先何があるかわからないし、ちょっと拝借しようかな。見た目ボロボロの剣だけど、ないよりはマシでしょ。

そう思って手に取った剣が、僕の異世界での物語の起点だった。

異世界生活初日。

向井 夕（むかい ゆう） 現状

武器 ？？？

防具 燃えカスの服

重要道具 もってない

所持金 500円（ポケットに入っていた）

技術 ？？？

職業

中学二年生だった

001 (前書き)

彼は助けられる。人の手が彼を明るみへと運んだ。彼の運はここで
尽きる。残るは悪運か。

僕は向井夕。むかい、ゆう、だ。

趣味は観光名所巡り。といってもまだ日本の数箇所しか回れないお小遣いが少ない極一般的な中学二年生。でも実際、あれってあんまりロマンがないよね。僕の好きなこととして未知かつ未発見で、誰も見たことのないような絶景を探すって事をしたいと思っていたけど、いまやインターネットやら、雑誌やら、何かを使えば簡単に絶景の写真が簡単に手に入る。

そんなことに半ば萎えているだけの、勉強に熱心で、スポーツもそこそこやっていると自負している、普通の中学生。

だった。

「小僧！ さっさと掃除を済ませろ！」

「じめんなさい……」

怒鳴らなくても掃除くらいするよ。飯を食うには仕方ない。さらに言葉も教えてもらってるのだから、頭が上がらない。けど腹は立つね。はあ……。

「いいか。俺の食堂で失敗はゆるさねえからな！」

失敗って言っても、言葉を知らない僕にどう仕事しろと。とりあえず、ウェイターみたいなことはやって手伝ったりはしてるけど、いかんせん言葉が上手に操れない。とにかく、今は掃除。掃除はとりあえず、掃除機的な道具が無いから拭き掃除が基本だね。今はあったかい時期だからいいけど、冬になったら僕はシンデレラになれるんじゃないだろうか。……ってあれ、おっさんどこいくんだ？

「アンデの、店長、どこ、行く？」

「買出しだよ！ 仕事を済ませとけ！」

と、アンデが店のドアを激しく開け閉めして出て行った。

……はあ。まさかここが異世界なんて思わないよなあ。もうあれから33日経つけど、慣れないよなあ。

異世界って気づくには時間はかからなかった。初めてあったあのおっさん、アンデが何も無い手のひらから急に炎をだす、元の世

界で言う、魔法を目撃したからだ。

こりゃあ、もう異世界としか言いようが無い。隆介が非常に行きたがっていたから、変わってあげたい気分だ。魔法が使えたらどれほどかっこいいことかと事あるごとに嘆いていたからね。ただ異世界の現実の魔法使いは料理屋を営んでいて、そんなにカッコイイわけじゃなかった。いつかもとの世界に帰れたら隆介に教えてあげよう。

掃除おっしまい。うむ、ほこりのある部分が見つからない綺麗具合だ。家事は得意なんだよね。さて、休憩……っと、まだ仕事が残ってた。インクと紙が視界に入ってしまった。

……はあ、食うためには仕方ない。仕事を済ませてしまおう。ペンはどこだ？

えっと、これ、どう読むんだっけ？ 売り上げ、だっけ？ まだ、異世界の言葉が覚えきれない。英語っぽいけど英語じゃない言葉だから、聞く分にはあまり苦労しなかったんだけど、話すとなるとだいぶ苦戦する。もう数ヶ月もすごしてるからちよつとづつは話せるようにはなってる。ホームステイってこんな気分なんだろうな。

でも、数字の概念は元の世界と一緒にだった。だから僕は今会計の仕事とか、主に数字に係る仕事をアンデ店長から貰えたんだだけだね。

実際僕はかなり運が良かった。何も口に出来ずにふらふらしてるときアンデに拾われなかったらと思うと、異世界のきれいな景色を見れずに死んでしまうところだった。意味も無く怒鳴り散らす人だけど、根は優しいと思う。腹立つけど。

僕の趣味は名所と景色めぐり。なんだけど、今の生活もままならない状況じゃそんなことも出来ないよなあ。元の世界であった小説とか漫画みたいなファンタジーの世界だから、戦ってお金稼ぎ。なんて無理だよなあ。すぐ死ぬよなあ。剣道はやってたけど、甘いよなあ。

魔法っていうのも存在するみたいなんだけど、三年間訓練しないと使えない上に、魔法使うには免許がいるみたいだし。っあ、ここ計算間違った。消しゴム……なんてないよなあ。紙は貴重品なのに、おっさんごめん。

……にしても、正直この借金は無いよなあ。家の事情とかまったく話してくれないし、強そうな体してるのに騎士ってやつにはなりたくないって言うし。騎士のほうがいい生活してそうなんだけどなあ。

……それに、なんだこの修繕費の高さ。毎度毎度何か壊してないところなのに店に金がかかるはず無いぞ。

冒険者御用達のお店だからか？ 味がいいし量も多いから若い人につけるのはよくわかるんだけど。気が荒い人も来るってことだよなあ。

なんて色々やってると、たしかまだ準備中の看板を出していたはずなのに、アンデ以外の人間が入ってきた。これは初めての出来事だ。もしかしたら、お店がもう開いていると思っただけなのかな？ ええっと、こういうときは

「これから、お店、準備してね」

だったかな？

「はぁ？ 何？」

どつやら違つらしい。そろそろと、四人ほどお店に入ってきた。

「えっと、まだ、お店、開いてる？」

「うぜえ」

罵倒された。それだけならまだしも僕のお腹に重い蹴りを入れてきた。痛い痛い。なるほど、こんな客がいるから修繕費が高いのかね。こいつら何しに来たんだ？

「アンデの野郎はどこだよ。さっさと払うもん払ってくれねえと困るんだよ」

「て、店長、売り買い」

買い物ってどうやって言うんだっけ？

「ちっ、使えねえ」

再び蹴り。あー、店長早く帰ってこないかなあ。買い物行ったらもうしばらく帰ってこないんだよなあ。

「おい、酒だ、酒。×××店にも酒くらいはあるんだろ？」

酒？ えっと、お酒を欲しがってるんだな。

「いま、売り買い」

「×××××な店だな。買う余裕があるなら金を払えつつのお。おら謝れよ。酒無くてすいませんってな」

はい、蹴り。何に対して謝れってんだよ。お店もまだ開いてないんだから酒無くても問題ないだろうが。アホどもめ。そろそろ避けようかな。でも避けたら避けたらでまた逆上するし。あーめんどくさいな。さっさと帰らないかな。

「ごめんなさい。ごめんなさい」

惨めに謝るしかない。まあ、自分が惨めとも思わないけど。確か、こういうのは一般的に惨めなんだよな。正直そんな感情より早く帰ってくれないかなあって思いのほうが強い。

……っていうか、客じゃなくね。気づくの遅かった。さっさと追い出せばよかった。

「あはっはっはっは、×××もねえ×××だな！」

……知らない単語で罵倒されてもなんら悔しくない。はあ。男四人が僕を指差して笑ってるのはなんとなく腹が立つけど、やっぱり何を言っているのか、単語を知らないから聞き取れない。

「にしても汚い店だな。掃除はやってるみたいだが、テーブルも椅子も古びた木材。しょっぱいなあ。処分に困ってるなら」

……こいつ。椅子なんか持ち上げて何するつもりだ。僕に当てる

つもりは無いみたいだけど。

「俺たちが代わりに処分してやらあ！」

……なるほど。客がやるんじゃないくて、こういう糞野郎がくるって理由から修繕費が高いのか。椅子が窓ガラスにたたきつけられて、激しく壊れてしまった。ガラスって激しく割れると、がしゃーん、ってよく擬音で表現されるけど、本当にがしゃーん、って音を立てるんだな。思ったより高い音でうるさいな。

「はははははっ！」

「こいつぁーいーぜ！」

まったく、どこの世界もいじめる側ってやつらは考えることが同じなんだな。……はあ。アンデに止められてるけど、斬り捨ててもいいかな。この世界のルールってのがいまいちわかってないから危険なんだけど、ここまでされて流石の僕もご立腹だよ。

「なにやってる糞傭兵共」

アンデさん降臨。助かるぜ！ただ、助けに来た男って言うには、大きな紙袋を抱いて持つてるのは格好がつかないよね。

「ああ？　×××騎士×××が何を×××てんだあ？」

「ああ、もう騎士ですらなかつたな。はっ、ははは！」

ニヤニヤと腹立つ笑いを浮かべる男。今アンデを騎士とおっしゃいました？　やっぱり騎士だったんだ。やめたのには理由でもあるのかね？

「さつさと用件を言え糞共。俺は今機嫌が悪い。焼くぞ」

うお、凄い剣幕。焼くぞって、本当に焼こうとするなよ、右手から火が出てますよ！

「うっ、く、金だ！ 献上金を出しやがれ！」

へいへい、敵さんびびってる。アンデはそのまま店の奥に消え、袋をもつて戻ってきた。その袋を傭兵達？ の一人に投げつけると、一言、消えろと言った。カッコいい。

傭兵達は苦い顔を浮かべながら、店を出て行った。

「小僧、大丈夫か」

「そこそこ。ごめんなさい」

「謝るな。お前こそよく我慢してくれた。ここであいつ等にちよっかいだすと、ちいと面倒だからな」

んー。……そんなものかね？ 人殺しが頻繁に起こるこの世界であいつら程度不慮の事故で行方不明になっても、特に変わりはないような気がするけど。ただ手を出すくらいのおちよつかいとかで小さい店を襲いに来るかな。これでも、元の世界じゃ善良な市民だったんですよ。

「それに、今は××だ。涼しくなるし、ちよっどいい」

アンデはにやりと笑ったが、一部なんて言ったかわからなかった。

後で聞いたところ、夏、って言ったらしい。

しかし、言葉1つ教えてもらっただけでも一苦労だ。相手は日本語も中途半端な英語も通じない相手だ。夏って言葉を理解するだけでもこの世界の日付とか、そういうのから手振り身振りで教えてもらって、この時期が夏だよ、って説明がないと季節すら理解できない。不便だ。

……もうしばらく言葉の勉強をしないと。

こっちの世界で生活もままならないや。……はあ。

異世界生活33日目

向井 夕（むかい ゆう） 現状

武器 ？？？

防具 異世界での服

重要道具 もってない

所持金 500円

技術

剣道

異世界の言葉（ちょっと聞ける、ちょっと話せる

中学2年生レベルの数学

職業

冒険者御用達らしいお店の店員（バイト

002 (前書き)

陽気な空気は彼に世界の知識を与えた。

さらに二ヶ月。ほど。確か、90日くらいかな。

って表現するけど、この世界で日付って概念は無いみたい。あるのは太陽が昇るか落ちるか。お月様が上るか落ちるか、とかとか。そのへんは元の世界と同じなんだな。

「おい、ユウ！ こっちのテーブルに酒を持ってきてくれ！」

「あいよ〜」

すっかり異世界の言葉にも慣れたし。ようやく生活になじめてきた、はず。……いや、まだ覚えてない言葉もあるけど。とりあえず常連の人達には僕の顔と名前を覚えてもらうくらい、このお店にも慣れた。馬鹿が献上金とか取り立てにきた以来、結構平和だし。

あ、お店の名前もようやく意味がわかった。英語で言うと、デモン。悪魔の店。ってことらしいよ。発音は、デトラオン。そんな言葉前の世界じゃ聞いたこと無いよ。なんかのゲームの魔法みたいな名前だよな。

「いやあ、しかし気難しいマスターのところでバイトできるなんてたいた子供だよお前は」

今僕に気さくに話しかけてくれるこの冒険者は、確か、シュツテイマン、だっけ。どうやら、良くあるファンタジー物に出てくるギルド的なものが存在するらしい。そこに従事する人は一般的に冒険

者と呼ばれるそう。ただ、モンスターを倒してお金を稼ぐロマンあふれるものじゃなくて、戦闘可能な人を集めてさまざまな仕事を発令する、職安のような場所らしい。特技が戦闘の二トの集まりって感じ。聞こえが凄く悪い。

でもその聞こえの悪くなるような職業が冒険者なんだけど、悪いことばかりじゃなく、やっぱりお宝を見つけることもあるらしい。ロマンはあるにはあるそう。ギルドもまだ未開の土地や、謎めく建物が多かったりするこの世界を開拓する人達を支援してくれるという事で、冒険をする人は冒険者になるべくギルドに加入するのが大半だそう。

なんだかんだ、ロマンを感じるね。僕はお宝を探すというよりは、未開の地へまだ見ぬ景色を見るってことに凄くロマンを感じる。胸が、熱くなるね！

まあ、そんな話もそこそこに、バイトの話に戻るけど、僕はお手伝いという行為は慣れっこだ。前の世界でも良くやってた。

「シュツテイマン、さん。他の人は、バイトしなかったの？」

うん、今僕がしゃべったんだけど、まだ片言なんだ。でも、結構言葉も覚えたよ。本当だからね！

「ん？ いや、したげ。古びた店のくせに客も」

殺気！

振り向くと、アンデが僕とシュツテイマンを睨み付けていた。怖い。この数ヶ月。アンデがよく誰かに殺気を放つから、殺気を感じ

取るのがうまくなってしまった。言い換えれば、人の気配を察するのがうまくなった。この世界では本当にいろいろな人が自分の気配を消して動いたりする。

消すって言うのも、息遣い、足運び、衣擦れ、そして常に人の影となる部分を意識してそこに自分を置くように動くのが、気配を消すってこと。なんか、こういうのも人が自然と発している気みたいなのがあって、そういうのを消すものかと思っていたけど、違うもんだね。

だけど、やっぱり本物の達人は何か感じ取って人の気配ってやつを読み取るらしい。

そういう人達をこのデトラオンに着てからずっと観察してきたから、五感で感じるほうの気配は結構消せるようになった。足運び自体は、剣道を習っていたこともあってなんら苦戦しなかった。

「おい、シユイ。あんまりマスター怒らせると、また焼かれるぜ？」

シユイってのは、シュツテイマンの愛称。んで、今シュツテイマンを呼んだのは、一緒に冒険者をやってる仲間だ。名前は教えてもらってない。これからシュツテイマンのパーティーは離れた森に現れた、熊のような人食いの魔物を討伐しに行くとの事。無事帰ってきてもう一儲けさせてもらいたいもんだね。

やはり、魔物っていう存在はファンタジーにお馴染みで、理解されない不思議な存在がいた。

死ぬとなぜか体の大半が消失して、殺したという証が残り、なぜかまた同じ種類の魔物が次々とどこからとも無く生まれる。なぜと

アンデに聞いてみたけど、それが常識だと取り合ってくれなかった。うむむ。まあそういうのがあるからギルドってやつが経営できるんだろっけどね。

「それは、勘弁願いたいな……。つまりな、ユウ。そういうことだ」

つまりすぐ腹が立つことがあったら、焼くぞと脅してくることだろうか。……。どうしてだろう。腑に落ちないところが多いけど妙に納得できた。

「酒、置いときますね」

この世界のアルコールはだいたいワインっぽい果実酒だ。ビールのようなものはなぜか高級品指定。というのも、今年是不作だったらしい。食べるもの優先すれば、飲み物は作れませんよね。そりゃ。不作だったからわからないけど、豊作だったら安いのだろうか？

「おう、ユウ、てめえも仕事頑張れよ！」

そういつてシュツテイマンは僕に数枚紙幣を握らせた。ありがたい。チップをくれる客はそう多くないから、大事にしないと。

「……というわけで、アンデ」

「おい、何で俺は呼び捨てなんだ」

「……は？」

「客にはさんつけて呼ぶじゃねえか」

文句あるのか？ だって、さん付けして呼んだら怒らない？

「いまさら、さん、つける？ アンデさん」

そう呼ぶとアンデは背筋震わせ、嫌な顔をした。

「……いや、やっぱり、いい」

ですよ。

僕は今期の業務成績を報告した。どうやら、季節の変わり目おきに大きな区切りというのが設定されてるらしい。元の世界で言う月のことだね。簡単に言えば春季、夏季、秋季、冬季が月の代わりみたいなので、今日で夏季が終わった。

「色々、必要費引いて、純利益は86万300ギス」

ギスはこの大陸での通貨。価値は大体1円 \parallel 1.5ギス。俺の感覚だね。よーするに、130万程度稼げたわけだ。

「……窓なおさねえとな。いや、もそろそろ肩共がくるから、多少待つか」

季節の変わり目に、取立てに来るらしい。しばらく平和だったのは、そういうことだったのか。

「まあいい。わかった。てめえには、店利益の2%やる。もってけ」

「……本当？」

「なに疑ってるんだ。取るもんは取ってるよ。本来なら5%やるよ。こだが、居候費で差っぴいてるよ」

なるほど。やふー。いやちよつとまっつて。そんなんで僕養ってけるの？ 3%つて、3万ギスにも満たない。円換算だと、4万5000円も無いくらいか。それで衣類あり三食あり住居ありって破格じゃない？

「それだけで、僕、養う？」

「それだけ？ 小僧の金の価値観なんかしらねえよ」

実は、この店の外には出たことがあるが、未だ買い物をしたことが無い。というのも、話せるものの読み書きがまだ不完全だからね。1ギスが1、5円つていうのも間違いかもしれない。

「じゃあ。2%。えっと、1万8000ギス貰います」

「……ごまかしてないよな？」

「……少し、ごまかしました。本当は1万7206ギス」

「なんだ、それくらいならいい、細かいのは持てないだろう。町にも行つて財布でも買うといい」

でも、せっかくお金ももらえだし、そろそろ動き出してもいいか

もしねない。給料日が季節の変わり目って言うのは遅くてたまらないね。

今まで集めてきたチップと含めて2万3000ギス。意外と冒険者っていうのは金遣いが荒い傾向にあるね。それとも、サービスを求めるにはそれが普通なのかな。ならチップを貰うまでは客を荒くあしらってもいいのかな？

まあ、それは置いといて、ちょうどいい機会だから、現状をまとめておくのもいいかもしれない。

「じゃあ、明日、休みください」

「……まあ、いいだろう」

アンデ、やさしいぞ？ 気持ち悪い。

「い、いいか。一日だけだぞ。夜の移動を避けるためという理由なら、二日後の明朝でも許す。いいか、帰ってきたらしっかり働いてもらっからな！」

なんていうんだ、これは、あ、あれだ、元の世界で言うシンデレの、デレ期ってやつだ！

隆介に紹介したら、喜ぶかな。いや、男のシンデレなんて気持ち悪い、って言いそうだな。やめておこつ。

僕は借りている部屋に戻って硬いベットに倒れこんだ。最初は硬くて寝ずらくてたまらなかつたけど、慣れてしまえば問題ない。

さて、2万と3000、ギスカ。まずどんなものがどう売られるのか、市場調査から始めないと。だまされるなんてたまつたもんじゃない。

情報収集とかもしたいな。この世界のことをアンデは何も教えてくれないし。僕の今いる町の名前くらいしか。たしか、ムー大陸の聖なる王国シャルルって国に属してるんだっけ？

そこに属する集落の中でも結構大きい集落にいるらしい。シャルルまでは歩いて1時間って言ってた。危険も無いってシユツテイマシが言ってたから、思い切って聖なる都、シャルルの町に行こう。シャルル国で一番の町だ。国の名前と一致してるくらいだからね。

……にしてもムー大陸って、あれだよな、確か、古代文明が栄えて、今は滅びてって言う、あれだよな。元の世界じゃそうなるけど、こっちでは健在ってことは、元の世界の昔は魔法が栄えてたのかな？

この世界には巨大な2つの大陸が存在しているみたいで、ひとつがムー大陸。もうひとつがパンゲア大陸。

パンゲア大陸ってあれだよな、元の世界のいろんな大陸の集合体だよな。

それより、ムー大陸とレムリア大陸、って時期違うよね？

ちなみに、アンデは火を扱う魔法使いだ。なかなか教えてくれないけど、昔は炎と剣を操る魔法騎士だったらしい。けど、この国じやそれはなかなか受け入れられず、ちょっととしたミスを大きく取り上げられて、首にされたらしい。

神聖な国としては、魔を司る術は忌み嫌われているらしい。便利なのになあ。

そのせいで僕もなかなか変な剣を使えない。

……はあ。なんだかめんどくさい。

あのまま死ねば逆に楽だったのになあ。

いやいや、逆にもこの世界で誰も見たこと無い世界を見て回れるって言うラッキーがあるじゃないか。そのために、お金だお金。飽きたら、元の世界に戻る方法でも探して、だめっばかったら、変な剣があるし。

とりあえず、今後の生き方は、まったり、考えるか。もしかしたら元の世界にも戻れるかもしれないし

異世界生活90日

向井 夕（むかい ゆう） 現状

武器 変な剣？

防具 異世界での服

重要道具 もってない

所持金 2万3000ギス（初給料） 500円

技術 剣道

ける 異世界の言葉（聞く、話す、ちよっと読む、ちよっと書

中学2年生レベルの数学

職業 デトラオン（悪魔の） 食堂店員 （バイト）

003 (前書き)

彼の才能は？

「すげえ！ ゴブリンみたいだ！」

「みたいだじゃなくてゴブリンですよ！！」

村を離れて30分。

緑色で二足歩行で、布切れで体を覆って片手に棍棒を持っている魔物と遭遇した。大きさ的には僕と同じくらい。僕は今150cmくらいあるから、ゴブリンも150cmくらいなのかな。

……って、あれ？ 魔物と会うことは限りなくない、ってシュツテイマン言ってたじゃん。確か、シャルルってとこで魔物が入りにくくなる装置みたいなのがあって、それが正常に活動している限る魔物はこの付近には近寄らないって。

その装置がおかしくなったのか？ それとも、近寄らないのはゴブリン以外とか、そういうことなのか？

にしても、このゴブリン。いろんな冊子とかゲームとかで載ってるままだなあ。元の世界のそういう情報もあながち間違っていないだね。

ゴブリンたちの棍棒装備はデフォルトなのかな？

「ちょっと、何喜んでるんですか！ た、助けてください！ どうにかしてくださいよぉー！」

そう叫ばれたように、見ようによつては僕たちは危機的状況にいる。僕と隣にいる少女を五匹くらいのゴブリンが囲っているようにも見えなくない。

うーむ。ここで死ぬわけには行かないしなあ……。でもこの剣は出来るだけ人前で使わないに越したこと無いってアンデが言ってたしなあ。周りは森で、人影は無い。走って逃げるにも、シャルルに行くも村に戻るも30分はかかる。

「ほら、僕、武器ないし？ あなた、どうにかしてください」

「ええ！？ 冒険者じゃないんですか！？ 神聖術を習得していらつしやる学生さんでもないんですか！？」

「……？」

色々不可解な単語が出てきたな。神聖術ってなんだ？

あ、そうそう、この女性は、シャルルに買い物をしに行くと言う事らしく、たまたまシャルルに行こうとする僕を見つけ

「心細いんです！」

と断つても何度も何度も頼み込んでくるものだから、最後には僕が折れてしまった。そのため今の今までついてきてた女性だ。どうやらこういった事態に対応できる人間だと思われていたみたいだけ

ど、残念ながら冒険者ではないし、神聖術も知らない。というか、僕みたいな子供でも冒険者やってる人っているの？

ただ、それを聞くような状況じゃないし、情報収集よりは事態打破に向けて努力したほうがよさそう。

「ただの村人ですよ。だから逃げませんか？」

「ひえ、やだあ、怖いよお。男なんだからどうにかしてくださいよお！」

泣き出してしまった。座り込んでしまった。この馬鹿女、これじゃ逃げられないだろ。

……見捨てるには後味悪いし、はあ。面倒だなあ。

「はあ、じゃあ、ちょっと目を瞑ってくれたら、助けますよ」

ばれなければ使ってもいいよね。斬り捨てたゴブリンの残骸とかは確認されるかもしれないけど、特に問題もないでしょ。さて、急がないと。ゴブリンはケタケタ笑いながら僕と女に近寄ってくる。にしても、調子が上がらないなあ。

「はい、言うとおりにしますからあ、助けてえ」

「じゃあ、早く目を瞑ってください」

女が目を瞑ったのを確認して、袖を捲る。すると僕の二の腕に変な模様が描かれているのが目に入る。円が二周ほど、描かれている。

その模様に集中する。何も無い空間から、剣を取り出すイメージ。

すると、左手から不思議なオーラが現れ、そのオーラが剣をかたどり、やがて、本物の剣となった。左手の模様も消える。……いや、若干残ってるのかな。薄くなってるだけみたい。

魔剣ライフドレイン。アンデが魔剣の効果から推測した名前だ。切った相手の生命力を奪い、剣の力へ変換する。世界には、魔剣とか、神剣とか、特別な能力を持った剣が存在するらしい。そのうちのかなりレベルの高い魔剣で、体の中にしまいこめる魔剣なんて、数えるほどしかないらしい。

レアな一品でわけで、マニアとか、金に目がない無法者な冒険者とか俺を殺しにくるだろうから、ってことで使うのは控えたほうがいいとのこと。他にも理由があるんだけど……。

そんな凄い一品をなんで持ってるかって？ そりゃ、異世界に来た瞬間に拾ったボロボロの剣がたまたま魔剣だった。それを無価値だと思わず拾った僕の運の良さ。今はボロボロじゃなくて、鋭い刃を携えた頼りになる武器だけだね。

とりあえずそれを両手で構える。あ、ちなみに左手から取り出したけど利き手は右です。

ゴブリン達は僕が武器を取り出したのに驚き、二匹が僕に攻撃しようとして近づいてきた。大振りで、すきだらけ。剣道2段の僕にそんな攻撃は、流石に通用しない。

それでも、二匹同時に切るの難しいので、まず一匹に接近。僕の急な動きについて来れなかったのか、たじろいでゴブリンが握っ

ている棍棒を振りぬけず、慌てふためいている。そんなゴブリンに僕は容赦しない。

『面!!』

久々に、日本語で気を入れて振る。後ろで小さく悲鳴を上げる馬鹿女が目を開けていないか気になったけど、ここで集中切らすのも良くない。

とにかく、ゴブリンを一刀両断。抵抗なく相手の体を通過した刃は煌き、切られたゴブリンは右側と左側がお別れする。その間から赤黒い血が飛び出して、倒れる。赤い血なんだね。

剣が振動して、刃の輝きを微かに増した。ゴブリンから温かみが消えたように感じた。

ポロポロだった剣がここまで鋭くなったのはこういう理由だ。始めは切れなかつたから、突き刺して殺していたら、どんどん切れ味が回復していった。名前の通り、斬れば斬るほど相手の生命力を奪い、その切れ味を増す武器ってことだね。

二匹目も

『面!!』

さっくり倒す。

ゴブリン三匹が僕へ向きなり、警戒しながら迫ってきた。しかも、頭も悪くないようで、三匹とも互いにフォーローに入れるような距離を保っている。

「……ま、まだですかあ……!? ゴブリンの音が怖いですう」

ゴブリンの標的は女へと切り替わった。でもそれは僕にとってはチャンス。素早く一匹に近づく。僕の接近に気づき、棍棒を防御へとあてがうけど。

『胴!!--』

素早く踏み込んで突きを放つ。豆腐のように木の棍棒を貫いて、そのままゴブリンも貫く。素早く引き抜いて、隣にいたゴブリンに向かつて

『籠手!!--』

横になぎ払う。ゴブリンは不思議そうな顔をしながら直立して立っている自分の日本の足を地面から眺めていた。ちよつと気持ち悪い。

そして、最後の一匹は

『面!!--』

一刀両断。

弱い。小学生を相手にしてるみたいだ。不意をついたといっても、割とあっさり出来るんだね。

……まあ、これで命の奪い合いは二度目になるわけだ。血を見るのは好きじゃないから、やっぱり出来れば逃げるに越したこと無い

ね。人間同士の切りあいには二度としたくないね。

キイイイイン

……お前は斬りたいってか。

キイイイイン

女を切りたいうって？ やだよ、悲鳴とか、うるさいじゃん。

……キイイン

はいはい、ありがとね。

剣を左手にしまっイメージ。実物から再びオーラに代わって、左手に収束していく。そして、左手に完全にオーラが収まる。そして、左の二の腕に変な模様が濃く現れる。それを確かめてから、袖を元に戻す。

どうもこの剣は人を切りたがる傾向にあるらしい。呪われた刀、ムラサメ、みたいな？ 洗脳効果とかあったらやばかったけど、この魔剣はそんなことは無かった。唆してはくるけど、そういう趣味もないし、必要が無きゃ切りませんよ。

「終わったよ」

「ひえ……キヤアアア！」

僕の姿を見て悲鳴を上げた。確かに、血まみれだけど。

「僕も好き好んでこうなったわけじゃないんだから。あまり叫ばないでくれますか」

ちよつと怒気を込めて言うと、女はひっ声を上げて、小さくうづくまった。

「ご、ごめんなさい。血が苦手で」

がくがくぶるぶる。隆介風に言うとかクブルしてる。んー。まあ、こついうときは皆そうか。春も、流石の隆介もやっぱりケンカが終わった後とか震えてたしなあ。

「僕も、苦手だよ。早く行こうか？」

僕がぎこちなく笑いかけてみる。こついうときは笑いかけるのが一番だつて春が言つてた。

「は、はい、ぶっ」

顔を上げて返事してくれた瞬間、急に笑われた!? な、なぜ!?

「へ、変な顔……」

う、嘘だ。僕は確かに、今微笑んでるはずだ。決して変な顔ではない。

「ぶっ、もっ、やめてくれませんか……?」

涙を瞳にためて、笑いをこらえている。

く、屈辱……！！

異世界生活91日

向井 夕（むかい ゆう） 現状

武器 魔剣ライフドレイン

防具 異世界での服（血まみれ）

重要道具 もってない

所持金 二万ギス（家に3000ギスと5000円を置いてきている。）

技術 剣道2段

ける 異世界の言葉（聞く、話す、ちよつと読む、ちよつと書ける）

中学2年生レベルの数学

職業 デトラオン（悪魔の） 食堂店員（バイト）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9290z/>

魔剣から始まる物語

2012年1月1日23時53分発行